

氏名	永野 翔大		
学位の種類	博士（コーチング学）		
学位記番号	博甲第 9342 号		
学位授与年月	令和2年2月29日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	ハンドボール競技における一貫指導システムの構築 に関する研究		
主査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	會田 宏
副査	筑波大学助教	博士（コーチング学）	山田 永子
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	木内 敦詞
副査	筑波大学教授	博士（工学）	高木 英樹

## 論文の内容の要旨

永野 翔大 氏の博士学位論文は、日本におけるハンドボール競技の一貫指導システムの問題点を解明するとともに、より合理的な一貫指導システムの構築に役立つ知見を得ることを目的としたものである。その要旨は以下のとおりである。

日本のハンドボール競技は、男子では1988年のソウル大会以降、女子では1976年のモントリオール大会以降オリンピックに出場できておらず、特に男子は世界選手権大会に連続して出場することも困難な状況にある。このような競技成績の低下傾向に危機感を抱いた公益財団法人日本ハンドボール協会（以下、JHA）は、2000年にユース・ジュニア世代を対象とした「ナショナル・トレーニング・システム」と呼ばれる一貫指導システムの運用を開始させた。2000年以降の国際大会における日本代表ハンドボールチームの成績を見る限りその成果は十分とは言えないが、このシステムの問題点、課題、改善点などについては十分な検討が行われていない。

第1章において著者は、上記のような研究の背景を詳細に述べるとともに、国内外における一貫指導システムに関連する先行研究を概観し、JHAが2000年から18年間運用してきた一貫指導システムが十分に機能していない可能性があることを明らかにしている。また、我が国のハンドボールにおける一貫指導システムの問題点を解明し、国際競技力を向上させるための合理的な一貫指導システムの構築に役立つ知見を得るために、一貫指導システムそのものとその根幹である競技者育成プログラムの2つに分けて検討する必然性を述べている。

第2章において著者は、JHAと日本における球技の団体種目において一貫指導システムを成功させている公益財団法人日本サッカー協会（以下、JFA）および公益財団法人日本バレーボール協会（以下、JVA）における一貫指導システムの構築過程とを比較することにより、ハンドボールにおける一貫指導

システムの問題点を明らかにしている。JFA、JVA、JHA において、一貫指導に関連した委員会の委員長または副委員長を務めた6名にインタビュー調査を行い、得られた語りを質的に分析した結果、球技の団体種目における一貫指導システムは「変革のための行動を起こす段階」「『抵抗』が発生する段階」「『抵抗』を乗り越える段階」の3段階の過程を経ること、またその推進要因には「変革のリーダーシップの発揮」が、阻害要因には「組織のメンバーまたは現場の指導者による抵抗」が存在することを示している。また、JHAの一貫指導システムには「競技者育成プログラムが機能していない」「日本の課題を競技者育成プログラムにフィードバックしていない」「一貫指導システムの射程が狭い」という3つの問題が存在していることを明らかにしている。

第3章において著者は、ハンドボール競技における強豪国であるドイツ、ハンガリー、デンマークと日本の競技者育成プログラムを比較することにより、日本の競技者育成プログラムの問題点を明らかにしている。分析対象国のハンドボール協会が提示しているそれぞれの競技者育成プログラムに対してテキストマイニング分析を行い、その特徴を各国間で比較した結果、ドイツは、身体的な優位性を保持したままスピードのある中での判断力を段階的に養成することで、最終的にはゲームの主導権を得られるようなリーダーの育成を目指していたこと、ハンガリーは、強いフィジカルの育成を最優先とし、グループプレーを中心としたチームプレーの育成を目指していたこと、デンマークは、いち早く数的不均衡下でのトレーニングを行うことによって予測力の向上を図っていたこと、日本は、年齢幅のある年齢カテゴリーを設定した中で、感覚的なプレーから理解されたプレーの育成を目指していたことを明らかにしている。また、日本の競技者育成プログラムには「目標像として提示されている Total Mobility (総合的な機動力) を持った選手を育成できる指導内容と方法が明記されていない」「年齢幅の広い年齢カテゴリーが設定されている」という2つの問題が存在していることを明らかにしている。

第4章において著者は、本論文を総括した上で、第2章と第3章で得られた知見から、日本のハンドボール競技における一貫指導システムをより合理的に再構築するためには、まずは育成の目標像を明示すること、次に明確な指導内容と指導方法を策定すること、さらに指導内容を日本の育成環境に適した年齢カテゴリーごとに編成していくことを提言している。

## 審査の結果の要旨

(批評)

永野 翔大 氏の博士学位論文は、国際競技力の向上を目指した日本のハンドボールにおける一貫指導システムの構築に関する問題点や課題を抽出しており、課題を解決するための提言もエビデンスに基づいて行われている。そのため、コーチング学研究領域の発展に貢献するオリジナリティの高い研究と評価できる。今後、国際競技力向上に影響を与える要因をマクロレベルで捉えることによって、研究の深まりが期待される。

令和元年12月13日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(コーチング学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。